

# ヘンタイ MC Ojisan

私達  
ヘンタイに  
されました

MC/洗脳/寝取られ/寝取り  
常識書き換え/感情操作  
バリキャリ/ピッチ化/  
悪堕ち/連鎖堕ち/人妻  
MILF/強い女性/乱交  
マルチヒロイン/

働くオンナ達編

Circle  
HO  
TRW



ドリアヌ

# ==Story Outline==

ストーリー概要

冴えない四十路おじさんが与えられたもの。  
それは**上級国民のためのショーの舞台**だった。

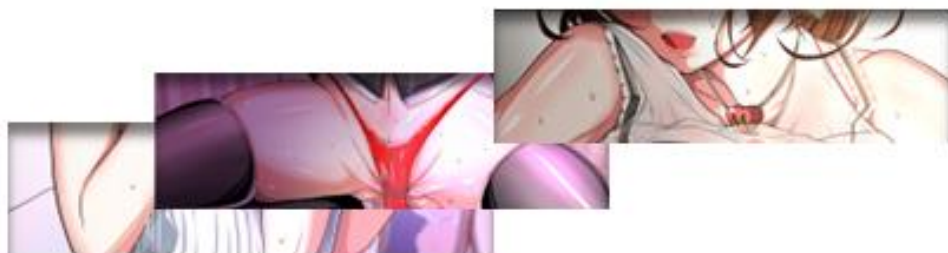
うだつの上がない清掃員の四十路おじさん、  
塩豚太(しおぶた ふとし)は世間を憎みながらパツとしない  
日々を送っていた。そんな中年男の憎しみはふとしたきっかけによって覚醒する。四十路おやじが**上級国民**に与えられたのは**洗脳装置のついたエレベーター**がある一等地のオフィスビルと**上級国民のために女達を教育**するという任務だっ



四十路おやじの世間への鬱憤が都会の真ん中で胸を張って働く**デキる女達**へと向かう。MCエレベーターによって**勝ち組の女達は都合のいい性の道具**へと成り下がっていく。



**暴走する墮落した性の宴はどこへ向かうのか。**



# Hentai MOC Ojisan

意識は高く  
頭は低く。  
おしゃれに  
エッチな姿。

意識高め  
ファッション  
デザイナー

最先端セクシー  
ランジェリー特集  
春のエロかわコーデ

できる  
オンナの

ゆるふわキャリア!



# 一:デザイン事務所新人編:錦ホシノ



俺の名は塩豚太(しおぶた ふとし)。肥満体  
を作業服に押し込んで今日も今日とてバイトに  
勤しむ中年男性だ。ここは東京駅前、丸の内の  
高層ビル。高層階には高級レストラン、低層階  
にはコンビニ、そしてその間の数十階は今をと  
きめく企業の洒落たオフィス。控えめに言って  
俺の存在は場違いだ。自分でもわかる。

通り過ぎる男女は高級スーツやファッショナ  
ブルな装いで多分俺の月給と同じくらいのも  
のを着ている。糞な格差社会なのは間違いねえ。

そんなことをぼーっと思いながらドアの手す  
りを拭く。コロナだとかでいちいち取手を消毒  
とか正気じゃない。そんなことを思っていると  
不意に扉が開いて俺の頭を打ち付けてくる。

「おい、気をつけろ、おっさん」

俺より二十は年下の茶髪にワックスマシマシ  
の若者が連れの子と俺を嘲笑っていく。糞、頭  
ぶつけたのはこっちなのになんで怒られなきゃ  
いけないんだよ。

「あーいうふうにはなりたくないよな。アレー生清掃のバイト止まりだぜ」

「もーそういう風に言っちゃだめなんですよ～」

連れの二十代前半のふんわりした八部丈のパンツに白いカーディガン  
を羽織った甘えた顔立ちの女がクスクス笑いながら注意する。というかそ  
の口調は注意する体をとりながら一緒に俺の嘲笑してやがるな。糞メス  
が。こういう事があるから昼間の仕事はイラつく。

俺は今しがた頭をぶつけたドアを確認する。Neo Avant-garde desig  
n Inc.ねおあばんとがーどでさいん…？たぶん、デザイン会社だ。あー  
いう調子に乗った若者がいかにも調子に乗ってビジネスだコンプライ

アンスだなんだと横文字を並べながらふんぞりがえっていきそうな会社だ。  
とりあえずその磨き上げられた金属製の扉をケータイのカメラで撮る。イ  
ライラをぶつけるように適当に切り上げる。まったく、やってられねえ。

そのまま俺は汚い業務用エレベーターに乗って屋上のペントハウスに向  
かう。いらつくことがあったから今日の勤務は終了だ。やってられん。

普通清掃員は深夜に入る。オフィスにとって俺みたいな汚い連中は視界  
に入れるのも嫌だってわけだ。ま、実際今日のような不快な思いをするこ  
とも少なくないからある意味清掃員にとっても夜のほうが気楽でいい側  
面もある。実際はめちゃくちゃ広いビルの清掃はかなり忙しいんだが…。

そんな胸糞悪い昼の勤務を俺が選んでいるのには理由がある。

使用人用の小汚いエレベーターをでると掃除道具がおいてある倉庫だ。  
そしてその倉庫のドアを開けるとピカピカでモダンな鏡面仕上げの廊下  
だ。その突き当りの両開きのドアを開ける。

さっきまで卑屈に丸まっていた背中が伸びるのを感じる。豪華なペントハウスには似合わない作業着がどこか心地いい。扉を開けると巨大な石と鉄のデスクが目につく。デスクの上に置かれた黒い石のネームプレートには『四十路清掃株式会社 社長代理 黒石シキナ』と金箔押しで書かれている。できるだけダサそうな名前をつけてやったのにこうして置かれると様になるから苛立つ。

「ご主人様、今日も清掃を終わらせられなかったのかな？」

ピカピカのデスクに座ってカタカタキーボードを打っていた女がこっちに向いてそうこともなげにいう。その相変わらず偉そうな態度にイラッと来るが、どうせこいつもメスだと思い直す。

白いタイトスーツにグレーのジャケット。胸元が大きく開いた挑発的な赤いカットソーが嫌が応にもその女の自負心を強調している。

俺が近づくと立ち上がって椅子を譲る。下半身を強調するような金色のベルトのバックルは純金だ。同時に机の上のネームプレートをひっくり返す。新しい面には『四十路清掃株式会社 社長 塩豚 太』と箔押しされている。

「この会社の奴らが俺をバカにしたんだ」

ドスンと椅子に座りながらさっきケータイで写メったのを見せる。俺のサイズにあわせてある椅子は快適そのものだ。

「まったく仕方ない人なんだから…」



そういいながら横でパソコンを操作して該当企業の社員名簿を開くシキナ。かがむとちょうどプリッとしたケツが突き出されてエロい。やっぱりコイツはエロい女だ。

「アバンギャルドデザイン株式会社ね」

俺の写真をそう読んで検索するシキナにイラっときて形の良い尻を揉んでやる。

「あんっ…ふ、どれ？」

気の強そうな表情とは真逆に俺のセクハラを受け入れ、社員のリストを呼び出す。このビルのオフィス部分には入館証がなければ入れず、入館証には顔写真が入っているため会社さえわかれば顔から個人を特定できるってわけだ。

ぞんざいにケツを揉みながらリストからさっきの顔を探しつつさっきの経緯を説明する。

「ん…くう…それはいけないですね。とつても失礼だね…んっふうう」

そういうシキナ自体がかつてなら俺のことなど歯牙にもかけなかっただろう。だが、シキナはこの国の暗部と対立し敗北した。俺はたまたま運良くシキナとこのオフィスビルの管理を任されることになった。従業員を洗脳支配する邪悪なこのオフィスビルの管理を！

「ふん、お前もずいぶん失礼だったくせにな」

「んふっ…その事は言わないでよ。私がバカだったんだからあ…」

くねくねとケツを浮かせて媚びるシキナ。俺がダメであればあるほど好きになり、甘やかしたくなるように『調整』済みの彼女がせつなそうな声を漏らす。本来のシキナは競争心旺盛で強い性格だが、俺に惚れさせることで牙を抜かれた形になっている。このビル自体が俺を甘やかすためにする装置である以上、俺というダメ人間を愛するようにしつけられたシキナは俺を甘やかすために俺の犬となる。

『無能でいるバニ！ そしたらおこぼれにあずかれるバニね！』そう俺にこのビルを預けたやつは言った。薄気味悪い着ぐるみを着ている男だった。

『有能な人間より無能な人間であれ』

それがこのビルの隠れたモットーだ。ケツをくねらせるシキナがそのシンボルだ。毎日ジムに通って完璧なボディバランスを俺のために維持しているこの女は有能だったがゆえに戦って敗北し、無能な俺のモノとなった。

「ふひっ、コイツとコイツだよ。俺を嘲笑ったのは」

画面上に先程の二人の個人情報映る。

「ふーん、まずはお仕置きしなきゃいけないかなあ…んふっ」

発情したような甘い声でシキナがささやく。いや、実際発情しているのだ。『敵』を与えられてシキナの残酷な闘争心に火がつく。かつて正義の為に戦っていた闘争心が俺というクズのために弱い者いじめに向かう。





「女の子の方は新卒で入ったばかりだね。磨けば光りそう。男の方はプロジェクトマネージャーで新人教育係かな」

そう言いながらシキナは体をオレに寄せ、ケツで俺の股間をスリスリする。高級なパンツスーツ越しにむっちりとしたケツがズボン越しに俺を挑発する。

「まっ、悪口ぐらいだからちょっと恥をかくぐらいで許してあげようかな」

そう言って冷たく笑うシキナ。

俺はニヤニヤこれからのことを妄想しながらシキナに二人に仕込んでいく暗示内容をささやく。ついこの間まで俺はパソコンのモニタ上で運命を変えられるのをビクビクしながら怯えているだけだった。いまや他人の人生をモニタ上で支配する側だ。シキナのエロいケツがなくてもいきり立つシチュエーションだろ？ひひひっと思わず汚い笑いが溢れる。

日が傾き始めたころ、二人を呼び出す。

ほとんどの人間が存在すら知らない最上階のpenthouse。そこにいきなり呼び出されてビクビクする二人。このオフィスのエレベーターは巨大な洗脳装置になっている。もちろん監視装置も満載だ。

「なんかやらかしたんじゃないかな」

「そんなあ～、あたしぜんぜん心当たりないですよ～」

そんな会話をしている二人の無意識に俺の『催眠暗示』が刷り込まれていく。

そして催眠エレベーターから降りた二人をシキナが案内する。

「こちらでご主人様がお待ちです」

スラリと格好いいシキナが言えば『ご主人様』という言葉さえも特別なブランドのように聞こえるから不思議だ。

昼間俺をバカにした二人が入ってくる。日が暮れて、俺の背後の窓にはきらびやかな都心の夜景が輝いている。すこし暗めな室内に入って二人の目が大きくに驚きく開く。

「黒石インベストメント顧問及び四十路清掃株式会社代表塩豚太様です」

冷たくあざ笑うようにシキナが言って俺に目配せする。



「ふひひ、昼間は世話になったな」

俺がそういう。

「え…昼間…」

男のほうは何のことかわからない顔をする。全くイラつく。記憶にすら残っていないとは。

「ホラ、先輩…あの掃除のおじさんですよ」

こそこそ女のほうが目打ちする。

「え…あ、すみませんでしたー！」

一瞬で理解して土下座するような勢いで頭を下げる。昼間あんなにバカにしていた、しかもバカにしていた事自体を忘れていたくせに。大した変わり身だ。

「いやいや、口先だけの謝罪なんていないからね。『本心』でどう思っているか教えてよ」

埋め込んだ催眠暗示のキーワードを口にする。これで二人は絶対に嘘は言えない。

「え、ありえねーだろ。あんなとこにいてなんかの罌だよ。誰だよ、オレをハメたやつ？つーかコイツが黒岩インベストメントの顧問、ウソだろ?! ただのくっせーおっさんじゃねーか」

そう大声で言う。次の瞬間、笑えるほどに慌てた表情で口を抑える。

「ふーん、そっちの女の子はカワイイねえ。自己紹介とその失礼なガキの紹介、それから二人の関係を『本心』でお願いできるかな」

「このセクハラ野郎！ ふざけん…」

男が一步前を出て怒鳴り始めた瞬間、シキナがピシャリと言う。

「静かにしなさい」

その瞬間、その男が黙る。本人自身が口を閉じてしまったことに驚愕している。二つ目の暗示はシキナの命令には絶対服従だ。

「ホシノさん、自己紹介をしなさい」

シキナの声が二人の背後から静かにする。

「あ、あの…錦ホシノと申します。アバンギャルドデザインに先月入ったばかりの新人です。こちらは弊社のプロジェクトマネージャーの三河原ケンと申します。ケン先輩は自信過剰でうざったいですが実績は確かなので公私共にご指導いただいています」

「ハー、プライベートでも会ってるんだ、ホシノちゃん」

「はい、先輩には彼女がいるので秘密ですが…」

「おい、それは秘密だろ！」

ハー可愛い顔して奪う気満々ってわけだ。なかなかクズな感じで競争社会生き残れそうじゃん、ホシノちゃん。

「っで、ケンだっけ？君は何股かけてるの？」

この少しのやり取りだけで嘘がつけないことを飲み込んだらしく男の方は口を閉ざしてオレを睨んでくる。

「ケン、言いなさい」

シキナの命令が飛んで、嫌がりながらも口を開く。

「よ、よん…股…」

想定より多かつたらしくホシノちゃんが先輩の方を振り向く。

「え…誰、誰ですか！ あと一人！」

なるほど、ホシノちゃんは3股までは把握していたと。中々ドロドロしてるねえ。さすがイケイケのイケメンだ。食べ散らかしてるわけだ。



「ふーん、中々のクズっぷりだね。ホラ、セフレの疑問に答えるのも先輩の仕事じゃないかな、ケン先輩」

シキナがクスクス皮肉る。

「取引先のアーバンテレビのプロデューサー」

うーん、社内のドロドロが社外に飛び火したね。超スキャンダル。

「え…じゃあアーバンテレビの受注は…」

秘密を知ったホシノちゃんの呆れ顔も中々カワイイね。

「ホシノさん、太様のところに行ってカーディガンを脱ぎなさい。触られても抵抗しちゃだめだからね。ケンはこちらにステイだよ」

シキナの指示に従うホシノちゃん。ちなみに顔はすごい嫌そうだ。

「おい、ホシノに触るんじゃねえーよ、クズが」

うーん、君も中々のクズっぷりだったけどね。

先輩が口だけ抵抗する中、小柄なホシノちゃんがこっちに来る。春っぽい淡い色合いのふっくらしたズボンにカーディガン。リボンベルトがまるでオマンコのラッピングみたいだね。かすかに香る甘い匂いは香水なのかシャンプーなのかな。薄いカーディガンを脱ぐと白い肩が露出する。ウェーブのかかった明るい茶髪がいかにもな感じだね。

「触ったらただじゃおかねーぞ、クズバイトのくせに！」

ケン先輩(笑)の罵り声をBGMにホシノちゃんを抱きしめる。うなじから香る若いメスの匂いが最高にそそるね。

「やめてください！」

ホシノちゃんがいうのを無視してホワイトのシャツ越しに胸を揉む。でかい、ケン先輩が味見したくなるわけだ。

「ヒヒヒ、大きいねえ、何カップなのか教えてよ」

「んん、でい、ディーカップう…やめ、やめてくださいい」

「汚ねえ指をどけろや、エロオヤジが！」

ゆっくりとホシノちゃんのおっぱいを揉みしだく。中々重量感があって肩がこりそうな巨乳だね。マシュマロみたいに柔らかくて甘い香りも最高だよ。こんなの歩くセックスシンボルじゃないかな。



「ホシノちゃんの男性経験を教えてよ、ヒヒ」

「ふう…ケン先輩でえ、二人目ですう。インターンで、んっくう…ケン先輩と出会ってえ、初カレと別れましたあ。つんん…しゅ、就職成功したいからあ…」

思ったより経験少ないんだね。そしてインターンの時に味見されてたってわけだ。

ケン先輩に見せつけるようにホシノちゃんのシャツをたくし上げてデカパイの上に乗つける。上品な色合いのブラを外すと入社したての乳首が覗く。すでに可愛らしくちょっと勃起している。

「おい、掃除のおっさんのくせに。ぜって一訴えてやるからな。」

お前の人生終わらせてやる！

セクハラ野郎が、キモいんだよ」

喚き散らしている先輩は徐々にホシノちゃんの抵抗が弱まっていることに気がついていないみたいだね。ホシノちゃんの三つ目の仕掛けはケン先輩が俺のことを悪く言えばいうほど俺のことを敬愛するようになるってことだ。ふひひ、先輩はずいぶん口汚く俺のことを罵り続けてくれるからね、ホシノちゃんの抵抗もそりゃ弱まるってわけだ。

キュッとカーディガンとおそろいの乳首を潰す。すでにちょっと硬くなってきてるのかな。

「ひゃあ…」

口をついて出た声に本人が恥ずかしそうに赤面する。

「おい…ホシノ…なんだよ」

「ち、違うのお…んっふうう」

おやおや、嘘は良くないね。正直に言えるようにしてあげなきゃね、ふひひ。

「ホシノちゃん、感じてるんだよね？」

クニクニと可愛らしく勃起した乳首をこねくり回す。必死で我慢するホシノちゃんもカワイイね。

「やめろよ。ハゲ親父のくせに俺のホシノに触るんじゃねえ」

『俺の』ね(笑)、四股しておいて。

「ホシノさん、答えて」

シキナの命令が飛ぶ。

「あああ…か、感じてますう…んん！ いいたくないのお…んふう」

言いたくないって言い訳の抵抗はセクハラに対してより上司への体面の意味が大きいのかな。じゃあ、そっからも自由になってもらおうかな。

ホシノちゃんの柔らかいもち肌を指先でなぞりつつシキナに目配せする。

「ケン、あなたには解雇通知書が届いているわね」

「え…」



絶望した顔のイケメン。この瞬間が最高に生きててよかったって気がするね。シキナがぺらい紙を押し付ける。

「読み上げなさい」

シキナの無慈悲な命令が響く。

「つく…」

唇を噛んで抵抗するのも一瞬しかもたない。機械的に読み上げ始める。シキナが手回して準備させたものだ。

「かっ…解雇通知書。○年○月○日、三河原ケン殿。アバンギャルドデザイン株式会社」



その一方でホシノちゃんの体が興奮に染まってくる。熱を帯びた肌にじんわりと汗が浮かんで、漏れる息遣いが甘くなってきている。この場の誰が勝者かわかってきちゃったかな。

「と、当社は貴殿を下記の事由によって解雇いたします」

「ふう…んんっ、そこお…」

薄い布越しに股間に触れると湿った感触がある。震えながらも快感に素直になる新卒の体。おっぱいは大きいのにちっちゃい体がおじさんのチンポに響くねえ。

「解雇日、○月○日。なお、解雇日まではペントハウス倉庫勤務とする」

「あっ…つつうう…んん…ふう…だめなんですう…」

「解雇事由…、う…取引先との不貞行為および利益相反。社内で複数人と…不貞行為を行い、セクシャルハラスメントを行ったため」

ところどころ抵抗しながらも読み上げるプロジェクトマネージャー。無情にもそれを聞きながらホシノちゃんの体はさらに性的な匂いを増していく。

「んんっ…ふうっ、あつつはああ…」

「なんでこんなクズオヤジにいい…」

その声を聞きながらホシノちゃんのおごをクイツとあげる。すぐに察して彼女の方から唇が重なってくる。

「ちゅっ…ちゅぷぷ…んちゅっ…んふう♥」

まだなれているとは言い難いフレンチキス。でも、だからこそ彼女の経験人数の正しさを裏付けている。

「おい、ホシノ…なんでそんな奴にキスしてるんだよ！」

「んふう…ちゆる…れろおお…んふうう…ちゅぷぷぷ」

解雇が決まった哀れなプロジェクトマネージャーの声を無視してキスを続ける。うなじ越しにふわりと鼻をくすぐるフェロモン。デザイン会社の若くておしゃれな女性社員が作業着のおっさんにキスをねだる。チロチロと小さい舌が子犬のように俺の舌に絡みついてきて、俺の汚れた上着に彼女のデカチチがこすれる。彼女の白い指が俺の背中を抱きしめる。

「つぶはああ…♥」



キスが終わると彼女の俺に対する眼差しは昼間とは全く違うものになっていた。かすかに潤んだ瞳。頬を赤らめて必死でこびようとしている。依存できる相手に出会ったような忘我的な表情だ。

「三人目がこんなおっさんでごめんね、ヒヒヒ」

「いいんです。塩豚さんなら、わたし、いいです」

そう言ってホシノちゃんは自分からおまんこをラッピングしているかのようにリボンベルトを解く。ふわりと柔らかい布が床に落ちる。上品なパンティ。

俺は彼女の腰を抱いて応接スペースのソファに向ける。白い指がサンダルを脱ぎ捨てる。

「おい、ホシノ！ お前、何だよ！ ビッチが！」

もうすぐ無職になる男の絶叫に彼女は耳を傾けない。まるで俺しか見えないかのような振る舞い。

視界の外でシキナの命令が聞こえる。

「ケン、ちょっと黙ろうか。そこで座って顔を上に向けて。そうそう。うるさい口は開けっ放しにして舌で私のオマンコをクンニだよ。ご主人様とホシノちゃんのエッチの鑑賞中クンニし続けなよ。クスッ解雇日までの三十日でちゃんとしつけてあげるからね」

夜景をバックにしたソファに腰掛ける。目の前には上半身はだけてパンティだけになったホシノちゃん。淡いパステルカラーのマニキュアで彩られた指が宝石箱を開けるように優しく俺のベルトを外し、丁寧に肥満体の中年オヤジのちんぽを露出させる。

「ホシノちゃん、今の『本心』を聞かせてよ、うひっ」

期待に変な声が止まらない。

「えっと、太さんに出会えてとってもドキドキしています。最初にあったときはあんまり良い印象はなかったんですけど、今晚お話できて百八十度印象が変わりました。太さんみたいな男らしくて、魅力的で信頼できる人であったことありませんでした」

今までの経緯にそんな要素一つもなかった気がするけど、この数十分の出来事は彼女にとっては完全にそういう記憶に書き換えられてしまっているね。

「太さん、どうか私を指導してくれませんか」

彼女がパンティを脱ぎ捨てる。あくまでも受け身を装いながらふんわりとフェミニンな体をくねらせて俺を誘う。

「ふひひ、一生バイト止まりのちんぽを突っ込むよ」

「あ、んん！ ひっどいんですからああ♥ 」

昼間俺に投げかけられた言葉をそのまま投げ返しながらかい体を押し倒す。サラサラしたうなじに鼻を突っ込みながら発情したメスの割れ目に欲望を押し込む。温かいヒダが亀頭に媚びるように絡みついてくる。

受け身を装いながらもすっかり濡れてるんだね。

「はっ…んんっくう…太いいい」



小さな体が俺の下で甘くささやく。見上げる瞳がせつなそうに誘惑して、甘く絡みつく小さな肉壺がチンポを歓迎する。

「ふひひ、ホシノちゃんのおまんこは狭いねえ」

「ふああ…♥ だってえ、太さんのがあ…んんっふううう…太すぎるんですう」

俺のものになったデカパイをムニムニ揉みしだく。幸せそうな笑顔がどうしようもなくみだらで俺の腰が無意識に深くえぐる。その腰の動きに無意識に合わせて体をくねらせるくるホシノちゃん。

「はっ…あっふうう♥ んふううう♥ 」

そして深くつけば突くほど嬉しそうに漏れる嬌声。一生懸命足を広げて俺に絡みついてくる二十代の肢体。大人しそうな顔をしながら出世のために体を使うような上昇志向の女が俺に媚びている。昼間軽蔑していた相手に股を開いて、キスをねだる。

育ちのいい白い肌は味まで上品で、思わずペロペロ舐めてしまう。二番目の男の目の前で釣り合わない三番目の俺がおっさんの唾でマーキングする。

チュプププププときめ細かなシルクのような白い肌を吸う。高級な美容液で磨かれた肌が甘く香り、舌を楽しませてくる。

「んちゅ…ちゅるるるるる♥

んっふう…ふう…あぁっ…」

彼女の方も俺の汚い肌に舌を這わせる。こそばゆさとともに征服感を満たされる。それを強調するようにホシノのピンク色の舌が子犬のような可愛らしい動きで汚い中年の肌を磨く。

「んんっ♥ ちゅっちゅぷぷぷぷぷぷぷ」

腰を打ち付けながら口づけし合う。暗示によって植え付けられた感情に突き動かされたセックスはきつと打算による上司の不倫よりもキモチイイだろう。薄暗い室内で白い躰はそれ自体が輝いているみたいだ。

「んっふっ…ちゅぱっちゅぷっ！ ちゅるるる♥ 」

唾液のやり取り。俺のたばこ臭い唾が新社会人の体に吸収され、ホシノちゃんの甘い体液が俺の口にちゅぷちゅぷ注がれる。ペロペロとお互い

の舌が体液を交換しあい、ますますホシノちゃんが俺のことを好きになっていく。

「ひゃあっ…はっ♡ ふううんん♡ んふうう♡ 」

「ああ、いいマンコだよお、フヒヒ。今の会社辞めてウチにインターンこない？給料でないけど」

俺の下に組み敷いて犯している新人にそう迫る。催眠なしならレイプでセクハラでパワハラってとこだ。だが、今の彼女は嬉しそうに答える。

「あっ、はいい！ イきますう！ んんっ♡

いっ、いかせていただきますうう！ んっ♡



太さんとお…あっはああ…お、お仕事できるならあ♡ お給料はあ…いりませんん！ 」

クチュクチュぬめった音を響かせながらホシノちゃんが気持ちよさそうに答える。すっかり俺に取り憑かれてるってわけだ。就職のために股を開いたその上昇志向で今度は俺のためにたっぷりエッチなことを覚えてね。

「はっ♡ はっ♡ はっ♡ 太さんとお仕事おおお♡ 」

恍惚と繰り返しながら裏返った快感の声を響かせる。

「ホシノちゃんにはデザインの会社より下着モデルの派遣とかがいいと思うんだよね」

パチュンパチュンと勢いよくチンポで肉褌を味わいながら優しく語りかけてやる。

「あっ、んん♥ 下着モデル…ですっかああ♥ 」

「うんうん。下の階に派遣の会社があるからね、まずはインターン。それから正規採用で頑張りなよ」

ふひひ、正規採用っていうか性器採用だけどね。この体で営業したら絶対人気出ること間違い無しの人材だよ。

「ひゃあい！ わたしい、頑張りますうう♥ んんんんんん♥ 」

うんうん、新人は素直さが大切だからね。ホシノちゃんくらい素直にがんばってエッチしてくれれば評価も上がるってもんだよ。

「ふひひ、頑張ってるね」

「んん！ がんばりましょう！ いっっしょうけんめいいい、がんばりましょううう♥ 」

「ひひ、頑張っておマンコしますだろ」

「あっあっあっっつふううう…がんばつれえええ、おっおまんこしますうううう♥ ♥ 」

普通では考えられないセリフもノリノリで言ってくれるね。マンコ使ってモデルだけじゃなくて営業職もがんばってね。

グニグニと円を描くように濡れそぼった新人マンコをかき回す。トロトロの愛液が変え編み付きながら床に垂れる。優秀なだけあって直ぐに空気

を読んで自分から腰を動かしてくるホシノちゃん。キュツキュツと亀頭を子宮口がまるで磨くみたいにこすりつけられる。

「あっふうっ…んんん！ つっくうううう！ イキそううう♥ イキそう  
ですううう♥ ♥ 」

「ひひひ、ホシノちゃんの働き者マンコにはご褒美ザーメンあげないとねえ、ふひっ！ 」

波のように体を波打たせながらキュツキュツとキツめにチンポに吸い付いてくる新人マンコ。小さいくせにフィット感が抜群で何より柔らかい。

「あっ、つくうううう！ んんっふううう♥ ひゃいひゃい♥

くらしいひひひひひひ♥ ご褒美せーえきひひひひ♥ お願い  
しますうううう」

二人でぎゅっと抱きしめ合う。二周り小さなホシノちゃんの体は昼間俺を嘲笑ったときよりずいぶん華奢で小さく感じられる。メスらしいチンポに最適なフィット感。オナホになるために生まれてきたような躰だと思う。

「きもちひひひひひひ…、…れ…すうううううう♥ 」

抱き合いながら快感に呂律が回らなくなりながら叫ぶ。

ビクンッ！

お互いの体温を密着させながら同時に震える。

——ビクンッ！





「あつくうううううう！」

快感に息が詰まったような音を出してのけぞって大きな胸を押し付けてくる二十代の小柄な体。その体にビュッビュッと絶頂のザーメンを吐き出していく。たっぷりと数十秒、白い肢体を抱きしめて欲望を吐き出す。

「はあっ…あつつううう…ありがとうございますう♥」

嬉しそうに荒い息をつくホシノちゃん。その体を抱きしめて再び堪能する。

「ふひひ、じゃあ次に行く前に今の会社の辞表届とウチの会社のES書こうね」

ぐっと一突きしてからドロドロのチンポをズルズルと抜く。泡立ったザーメンとまん汁のシェイクがふわふわの肉マンコからとろとろ溢れ出す。

「あんっ♥ んんふうう…」

名残惜しそうに息をついてもぞもぞ起き上がる。裸のホシノちゃんを四つん這いにさせて、まだ硬さの残る事後チンポを突っ込んで、そのまま啜えさせた状態でデスクに戻る。途中、ケンが正座させられ、上を向かされた顔にシキナが座っている。そのシキナは俺たちのプレイを見て股間を濡らしていて、ケンの舌がバイブ代わりにクンニしているのだ。ぢゅぢゅぢゅゆるるるるるとケンの口が下品に吸い上げている場所にわざとぶつかりに行く。

「おい、気をつけろよ、ガキが」

昼間投げかけられた言葉をそのままぶつける。シキナに座られてセットした髪はぐちゃぐちゃに乱れ、上下に舌を動かし続けるイケメン。

「あーいうふうにはなりたくないよな。アレー生クソマゾ奴隷だね、ふひひひ」

ぐっと頭をつかんでチンポを維持して一気に引き出す。優秀なホシノちゃんは空気を読んでクスクスいう。

「もーそういう風に言っちゃだめなんですよ〜」

俺のザーメンまみれの顔にチンポをペチペチはたきつけられながらクスクスと昼間の笑顔でわらう。やっぱコイツかわいいね。ホシノちゃん見つけたとこだけはあのクソマゾ優秀だったかもね、しらんけど。

「ふひひ、じゃこっちでチンポ啜えながら書類チェックしてね」

「はい、よろしくお願いします♥ 」

うんうん、新人は元気が一番だね！ゆるふわマンコな新人でしばらく楽しめそうだ。まっ、しばらくは悪口の反省として清掃員してもらおうけどね。

翌朝。始発前。Neo Avant-garde Design Inc.の扉の前にホシノちゃんが立っている。きちんとシャワーを浴びてメイクし直して完璧な装いだ。会社の上司の机に辞表願いと会社の鍵を置いてくる。そしておもむろにハサミでズボンの股間に切れ目を入れる。下着は着ていない。さっき髪とおそろいの色に染め直した陰毛にソープをまがして泡立てるとハンドルを磨き始める。

「ん…ふう♥ 丁寧に磨かなくちゃ」



錦ホシノはインターンの最初の一週間は四十路清掃株式会社に派遣されてMCビルディングの清掃と塩豚太のソーププレイに務めることになったのだ。清掃には向かないしゃれた靴で背伸びして一生懸命ドアハンドルを陰毛で磨き上げる。始発が動き出す頃にはpentハウスに戻って昨晚のプレイで汚れた室内をきれいにしなければならない。太社長は寝ちゃったからその間に部屋を掃除して、新しく配置された浴室で待機しながらスマホでソーププレイの教材を見る研修を受けなければいけない。

初日からハードだけど太さんにお仕事いただけるなんてうれしい。一生懸命頑張って今後に繋げなくちゃ。さっそく頂いたMCリクルートのインターンメニューはソーププレイの研修からビジネスマナーまでぎっちりスケジュールが組まれていてかなりきつそうだけど、何事もはじめが肝心なんだから。

「んん…これからちょっときつそうだけどお…、太さまのご指導いただけるんだから、頑張らなきゃ」

下着モデルの仕事に適正があるなんて思ったことがなかったけど、太さんに言われた時、直感的に転職だと思った。前の会社のことはさっさと忘れてエッチな体作りにつとめないと。

そう思うと自然とハンドルを磨く腰使いにも力が入る。最後にソープで泡立ったハンドルをお気に入りのカーディガンで拭く。お気に入りの春コーデも今ではなんとなく地味で自分には似合わない気がする。これからはもっとセクシーでエロティックなコーデを選ばないと。

一ヶ月後

錦ホシノが塩豚太に遭遇してから一ヶ月がたった。OJTを兼ねたインターン期間が終わり、正式にMCリクルートに入社することになった。

「失礼します」

屋上のペントハウスの扉をくぐる。バッチリメイクして一ヶ月前と同様の洒落た出で立ちの錦ホシノだった。ただ違うのは当時と違ってカーディガンを羽織っておらず薄いシャツ越しにブラが透けている。薄いシャツも下乳のあたりに切れ込みが入れられており、アダルティなテイストが強化されている。ふわふわの七部丈のパンツスーツも透けており、黒いパンティが外からでもよく見える。サテン生地 of 光沢のあるブラパンティセットはホシノのお気に入りだ。



いつも通り場違いな作業服で社長椅子に座る塩豚太。

高いヒールのサンダルでモデル歩きしながら下着を見せつける。恥ずかしさはない。下着モデルなのだからいつでも商品を展示するのが仕事だ。下着が隠れる服は選べない。

「錦ホシノ、お陰様で無事インターンを卒業できました。正式の契約書類をお持ちいたしましたので確認お願い致します」

「あー、久しぶりだね」

最近顔を見ていないと思ったら完全に存在を忘れてたよ。ソーププレイさせてエロ下着モデルに派遣してたとこまでは覚えてたんだけどね。

「っで、書類ってどこ？」

その指摘通りホシノは手ぶらだった。

「はい、こちらになります」

モデル歩きのままターンする。透けたシャツ越しにパンティの後ろに挟まれた封筒が見える。

「へー、じゃあもうね」

意図を察してニヤニヤ鼻の下を伸ばしながらそういう。

「はい、よろしくお願いします」

嬉しそうに俺の腕の中に入ってくるホシノ。相変わらず小柄だからだ抱き地抜群だ。ギュッと抱きしめたら初めてあったときより甘いフェロモンが鼻をくすぐる。個人別にフェロモンの量を計測し体臭が気にならない限度でフェロモンが最大化されるようにシャワーの頻度が調整されているためだ。

淡い色合いのリップがそっと俺の厚ぼったい唇に重なる。俺好みのレモンカードのエッセンスと精力剤を配合した特別なルージュだ。

抱きしめて当然の権利であるかのように尻をももうとした中年キモオヤジは気がつく。ホシノのズボンにはスリットが入っており、直接尻がさわれるのだ。

献身的な甘い口づけを堪能しながら太い指がスリットに入る。サテン生地サラサラのパンティはなでているだけでも指に心地いい。しかも手の動きに合わせて絶妙にお尻をくねらせてくるのだ。こんなのエロすぎる！

「んん、つぶ…ちゆるるる…ふうう…んちゅがつ…」

以前とは比べ物にならないようなスムーズさで舌が絡まりあい、くねくねと淫らに尻がくねる。

たっぷり十分は口づけしたあとで塩豚が封筒を抜くとキスが終わる。

「書類を確認されている間、すこしマッサージさせていただいてもよろしいでしょうか」

胸を強調するように若干前かがみで腕を組んで上目遣いで提案する。俺は応用にうなずいてやった。最初にあった時に俺を見下していたオンナが今やエロ衣装で媚びながら誘ってやがる。



「では失礼いたします」

膝を着いてベルトに手をかける。胸元にハート型のQRコードがタトゥーが彫られている。MC済みの商品の証だ。

「うわぁ、ご立派ですね！」

取引先のオフィスを褒めるかのように前のめりでグロテスクな肉勃起を褒めるホシノちゃん。笑顔が眩しいね。

「ふふ。楽にしてくださいね」

丁寧に春色のマニキュアに彩られた指が赤黒い肉勃起を扱き上げる。

「ハーホシノちゃん下のマンションに入るんだ。高くない？」

「シキナさんに勧められましたから。それに新人の間は二十四時間待機できたほうが良いからって」

MCビルディングの上層階には居住用のスペースがある。都心ということもあって月十万のワンルームだが、うちの社員たちには人気だ。

「試用期間中は最低賃金なのでちょっときついですけど、こうしてご主人様に直接ご指導いただけますしね。」

あ、しつれいします」

そう言いながら優しく彼女のシャツの下乳のスリットに俺のチンポを導く。ふにふにと柔らかい双乳の谷間に挿入される肉棒。柔らかさと暖かさ、そして丁寧に先走りをまぶされてまるで温められたおしぼりに包まれているような感触だ。

「楽になさってくださいね」

そう言いつつ彼女がテーパーパンツのスリットから指を入れる。

「あ…んんっ」

せつなそうな顔をしながら腰を浮かせる。

「んふっ、ローションを使わせていただきますね」

ホシノちゃんはなんとパンツと膣の中でパイズリ用のローションを温めてくれていたのだ。

ホカホカの人肌に集められたローションがとろとろと乳の間から覗く俺の亀頭にかかる。まるでケーキをホイップで飾り付けるような楽しそうな表情でパイズリの準備をする。

「んっ…♡ ふうっ、とってもエッチですよ♡」

そう甘く言いながらグニグニとおっぱいをもみしだいてローションを行き渡らせる。薄く透けたシャツにランジェリーと素肌が張り付いてすごくエロい。そしてニチャニチャとぬめった膨らみで包み込むようにしながらパイズリし始めるホシノちゃん。視線はずっと俺の方を見て、反応を観察している。



飼い主のご機嫌を伺う飼い犬みたいな従順さで。卑猥な格好も今どきのファッションと組み合わせているせいでどこかおしゃれにすら感じる。そしてそんな普通なら絶対縁のない女の心を込めた奉仕を堪能する作業着姿の中年オヤジ。まったくMCビルディングは最高だね。

「んっふう♡ ご主人さまの、お、おちんぼ様たくましいですう♡ 」

ふうっと吹きかける息が亀頭をくすぐってエッチだ。

「深夜は四十路清掃で元職場の清掃、昼間は元職場に派遣、夜はランジェリーパンティップのセクシーモデルなんだ。元の職場に派遣されるのって気まずくない？うヒ

「んっ…♡シキナさんがあ、説明に行ってくださいっんですよ。んふっ…」



ニチャニチャと音を立てながら乳を揺らすと、おっぱいが吸い付くようにチンポを包み込んでくる。

「以前よりもお、人件費少ないですし、普通に昼間働いていたほうが夜の仕事のブランド力も上がるんですってえ…んふう。あ、お口でも気持ちよくさせてもらいますね」

そう言いながら透明な唾液をとろとろと赤黒い俺のチンポに垂らし、一生懸命亀頭に向かってチロチロと舌先を伸ばす。ぎゅううっとおっぱいを沈み込ませながら尿道口をピンクの舌がちらちら刺激する。時折じゃまになるウェーブのかかった髪をかきあげる仕草がたまらない。

「ちゅっ…んんっ…ふう、それに、前の会社でも配置転換させてもらいましたから…んふう大丈夫です♡」

優しく微笑んでそういう。昼間働いているおしゃれなデザイン事務所の新人。それがこんな顔で積極的にパイズリしてくるとは思いもしないだろう。

ヌチョヌチョと先走りとローションと彼女の涎の混じったヌレヌレのチンポをオッパイでしごく速度が徐々に上がる。摩擦で卑猥なミックスローションがさらに温かくなり、きもちいい。快感のボルテージが上がっていく。

「はっ♡はっ♡はあっ♡」

ちょっと狂気じみたことをいいながらニチャニチャと甘い笑顔でパイズリしてくる。

「いつでもイってくださって構いませんからね♡ちゅちゅちゅ…」

彼女の息も上がる。



その熱い息があたってさらにチンポにクル。

真っ昼間からきっちりとおしゃれに着飾った新人のパイズリ。昼の太陽に煌めく体液。ムレムレのメスのフェロモンに包まれて絞られる。

「ん…イクぞおおお！」

いい匂いのする髪に包まれたホシノちゃんの頭をつかんでチンポに擦り付ける。気取ったオンナをザーメンで汚す優越感に打ち震えながらビュルルっとおもいきり吐き出す。

「ふーよかったよお」

手を話すとファンデーションの上にザーメンを重ねられたホシノちゃんが上目遣いで声をかけてくれる。

「満足してくださって私も嬉しいです。いつでも気が向いた時にお呼びくださいね」

彼女の契約書にサインする。

「控えは今がよろしいでしょうか、それとも夜のほうが都合がよろしいでしょうか」

ザーメンまみれの顔が嬉しそうに俺に聞く。

「フヒッ、じゃあ次はホシノちゃんの営業を見せてもらおうかな」

「はい、承知しました」

そう言いながら軽く顔に飛び散ったザーメンを拭って舌でなめあげる。妖艶な動きだ。そのうえで、俺をソファに座らせると自分も隣に座る。キャバクラみたいだ。

「私は錦ホシノと申します。ぜひ、おちんぼホシイノのホシノとおぼえてくださいね」

そう言いながら密着してくる。キャバクラではありえないような積極的なサービス。

「エロティックドレスはまだできたばかりの会社ですが、男性のための女性下着をテーマにしているんですよ」



おっぱいを押し付けてくる。先程パイズリで出されたザーメンが谷間でにちゃにちゃと泡立つ。

「このショーツとってもかわいいですよ？手触りも確かめてくださいませんかあ」

淡い色のリップの唇がそう言う。ゆっくりと見せるようにリボンベルトをほどき、透けていたショーツを露出させる。密着しながら俺の指をショーツに誘導する。

「触る方の手触りに配慮してサラサラの生地なんです。それに、吸水性に優れていて、濡れたらすぐわかっちゃうんですよ」

あざといほどに誘いかける口調でそうささやく。たしかに薄いショーツには線状のシミが広がっていて、彼女が発情しているのが丸見えだった。

サラサラとした生地に触れる。

「つんあうう…」

クチュッと湿った感覚とともに艶めかしい吐息が聞こえる。

「んふっ…エッチのじゃまにならないことを試して下さって大丈夫ですよ。むしろ、ん…つくふう…ゆっ、ゆるふわデザイナーズマンコを通じてえ、ハっ弊社のフィロソフィーを感じていただきたいんですうう」

下着越しに撫でると彼女の声が淫らに上ずる。同時に、挑発するように丁寧にマニキュアを塗られた指が俺の股間を軽く撫で回す。再び勃起する股間。

「ふふふっ、このショーツ、ハメる時にじゃまにならないようになってるんですよ～」

そういいながら挑発的にずらして見せる。赤い淫らなクレパスが洒落たデザインの布からちらちら見える。

「ふふふ、どうぞ。エッチにじゃまにならないってお試しください！」

そう言って意味深に微笑む。俺は当然のように彼女の小さな肩をぐつつかんだ。そのまま正面から一気に彼女の見せつけているメス壺に自分の肉系を打ち込む。柔らかく、温かい肉が包み込むように受け入れてくる。

「んふううつつ、シルク百分百でええ、はああ…こ、高級感もありますしい、んんつつくうう…ハメるときのおお、はあっ、あああああ！」

俺がずっぴりと突き刺す中でも営業トークをやめない。俺を潤んだ目で見上げながら、切なげに快感の声を上げながら、

「じゃまにいい… あっあつつふうう♡なりませんん♡」

潤んだメスの目で見上げながらも片手ではショーツを示し、宣伝する。あくまでも主役は下着であって彼女はモデルであり営業のオンナでしかない。そういう卑屈な謙虚さが伝わってくるような販売姿勢だ。

その一方で淫らにも湿りきったオンナの部分は暖かくチンポを包み込み、商品を汚す熱い愛液をあふれるほどにほとばしらせる。



「はっ…あああ、お客様のおお…太いいいいい！

いい、いいんですうう！んあつはあああ！んつつふううう」

洒落た衣類が汗と二人の興奮した液体のシミで汚れる。でも、汚れれば汚れるほどに興奮してますます腰を激しく降ってしまう。以前なら絶対俺を相手にしなかったような意識高いオンナが媚びて、ヨガって、マンコを差し出している。

洒落た服が汚れて、キラキラのアクセサリが腰をふるたびに揺れる。

俺のチンポの動きに合わせて気取った口がアンアンあえぐ。

「んつつふうううう…♡」

セクシーな首筋に吸い付く。白い肌にキスの跡がつく。このオンナを思うがままにしているという征服感に股間がさらに反応する。鼻をくすぐる甘いメスの匂い。

パンツを売るために股を開く。そして俺に全身を喜んで捧げて、全力で媚びる。まったくもって、可愛いメスだ。

「あっ、すごいです♡たくましくてええ、で、でもおおお、破れない！破れないでしょおおお！ひゃああああ、は、激しいエッチでもおお大丈夫なんれすうう」

そういいながら彼女の股間がチュップチュップ音を立てながら俺を締め付ける。

「はああっ、あっ！どうぞおお！中に！中に出してくださいいいい！ふああ…つふううう…」

俺の腰振りに合わせて、甘えたようにおねだりする。

「ほら、んっふううう！きてええ…だしてくださいいい♡」

甘えたように見下していた男の種を必死でおねだりする。まさしくメスらしい姿、メスらしい仕草だ。

「お、おねがいれすからあ。濃いザーメン、ドロドロの赤ちゃんのおしるうう～くださいいいい」

上目遣いで喘ぎながらそういう。股間にクル。

「くそっ、エロすぎだろ！ウヒヒヒ、だすよおお」

俺は興奮をあらわにしながらそう宣言した。

「ひゃああああいいいい！ど、どうぞおおお！」

いつでも、いつでもきてくださいいいいい」

積極的に前進を密着させ、腰をクニクニと動かせながらそういう。

「うおおおおお」

思わず唸ってしまう。そしてその瞬間、俺は思いっきりホシノの子宮口に  
ブチュウっと鈴口を密着させてキスする。そしてそのまま  
一気に薄汚れた劣等ザーメンをキラキラ子宮にトップリ  
注ぎ込んでやる。

「んんん……くう…っふううう」

俺の腕の中で抱きしめられた美しい体が密着しながら  
ザーメンの余韻に吐息を漏らす。

「んんっふううう…熱いですううう」

そういいながら体をずらしてゆっくりと離れようとする。  
そしてそのまま膣肉からまだ硬さの残る俺のチンポをズ  
ルリと抜き出す。

「あはあ、大きいから、オマンコしまらないですね。

おチンポの形になっちゃってて…」





そうビジネススマイルを浮かべながら言う。下半身の乱れ具合と赤く染まった顔、荒い息遣いと自信満々の口調のギャップがエロい。

「でも、大丈夫なんですよ！こうして」

ずらしていたショーツを元に戻す。湿った下着が張り付く。

「マンコに貼り付ければ、ちゃんと蓋にもなるんです。ザーメンはこぼれずちゃんと受け止められるように何度も試行錯誤したんですよ。大切なザーメンをこぼさない、エッチのじゃまにならない、可愛くセクシーに体を彩る最高の下着はどうですかああ？」

証明するようにクイックイッと腰をふって見せる。乱れた服。ドロドロの下着。瀟洒なファッションは見る影もなく淫らなシミに汚されている。それにもかかわらず自信満々で腰をカクカクふる彼女はまるでまだ足りないアピールしているビッチみたいだ。

プライドもなにも全て俺好みに変えられたメス。最初にあったときのムカつくホシノはもはやどこにもいないことは明らかだった。

「フヒヒ。まだもう少し試したいな。今度はお尻のなで心地とかね」

「はい、承知しました」

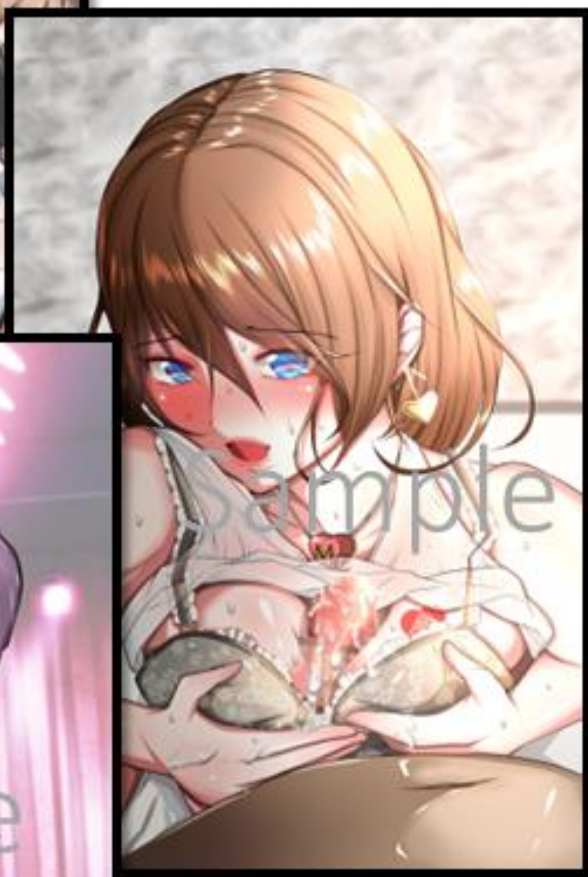
そう言って尻を突き出す。完全に調教済みのメスだ。



# ==Visual Sample==

## サンプル画像紹介

ドリアーヌさんの美  
麗な挿絵と立ち絵を  
多数配置。それら全て  
**カラーイラスト!**



# Hentai Moojisan

愛されボディは  
こうして作れ！  
最新、エロかわ  
ストレッチ特集

愛される膣の作り方  
マントレ、膣トレ

人気の  
キャバ嬢コードを  
ビジネスに活かす！

現役ジム  
インスト  
ラクター

強気な態度、  
だけど本当は  
犯されたがり！



## 二：トレーニングジムイケメン系営業女性編 綺羅星リサナ



「たまには運動でもしたらどうなの？」

ソファの上で缶ビール片手に漫画を読んでいるとシキナが仕事しながら声をかけてくる。

「ヒヒ、そんな、だるいことしないよ。つというか毎日二時間はビルの清掃行ってるし結構頑張ってる方じゃないかな」

「もう、それだっただいたい途中で飽きて帰ってくるじゃないの」

パソコンから目をあげずにシキナがそういう。まったく俺のオナナの癖にカーチャンみたいなことをいいやがって。犯すぞゴルアと心のなかで毒づく。

「まーいいじゃん。別に」

「そう言うと思って三階のジムの方に営業を頼んどいたよ」

「なんだよ、だるいな」

「そう言わずに下着ぐらい着なさい」

「へいへい」

そう言いながら立ち上がって床に転がっていたバスローブを取り上げる。最近仕事の時以外はバスローブが普段着になりつつある。羽織るだけでいいからお手軽なんだよね。

「まったくしかたないんだから」

そういいながらバスローブの紐を結んでくれるシキナ。なんだかんだ言いながらやっぱりコイツはいいオンナだ。

「それじゃあ、呼ぶね」

シキナがインターフォンに向かってなにか言う。オートロックが解除される音がして、普段聞き慣れた革靴やハイヒールとは違う足音が聞こえてくる。

コンッコンッコンとやや強めにノックされ、「失礼します」とハスキーな声が聞こえる。

「今日はお問い合わせありがとうございます」

入ってきたのは長身で筋肉質なミディアムショートの女だった。シキナよりも高いから一八〇センチくらいありそうだ。

ラフに羽織ったジャケット。清潔感のあるカットソー。下半身はかなりぴっちり目のズボンのようなスパッツのような感じの服だ。そして、スニーカーというあまりウチの女たちが履かない靴を履いている。全体的にラフな格好だというのにどこか受け入れてしまうのは彼女のビジュアルが、ハスキーボイスと相まってなかなか整っているからかもしれない。

名刺を差し出してきたのをシキナが静止する。

「今回説明をお願いしたいのはこちらの御方です」

そういつて来客用の隣接スペースに案内する。完全にシキナのことをこの部屋の主だと思っていた彼女は示された俺の方を見て『ひっ』と小さな声を上げる。明らかに嫌悪とパニックの混じった表情が一瞬浮かぶ。

当然だ。視界の外に明らかに小汚いデブでごま塩頭の中年男がバスローブだけ羽織って座っていたんだから。

「弊社社長の塩豚です」

シキナがニヤニヤしながら名刺を差し出す。衝撃に固まってしまったそのイケメン女はぎこちない様子でそれを受け取る。

「あ、すみません。失礼しました」

切り替えたのか表情を営業スマイルに戻して、こっちに来る。シキナが後ろから声をかける。

「リサナさん、楽にしてくださいね」

ちらっと視線を合わせるシキナ。明らかに『準備完了です。楽しんでくださいね』というメッセージだ。

「今日はお話を聞いてくれてありがとうございます。」

シルバーフィットネスのパーソナルトレーナー兼営業部長の綺羅星リサナです」

こっちに向き直ると俺の目を見て自己紹介してくる。まったくコイツも自信満々かよ。かすかに香る甘いメスのフェロモンに鼻をふくらませながら心のなかで毒づく。

一瞬の間。俺が自己紹介しないと気がついたリナサは持ってきたカバンからチラシとかを出し始める。

「塩豚さんは健康について心配してるからジムの詳細を聞きたいって聞いたんだけど、どんなことを心配してるのかな」

俺の自己紹介がなかったことから苛立ちを隠さなくなったリナサ。少し棘のある言い方だ。

「んん、別に俺は気にしてないんだけどね。シキナが勝手に呼びやがって」

そう言いながら今日二缶目のビールを開ける。プシュツという爽やかな音とともに幸せのホップの香りが広がる。だってのに目の前の女は眉をひそめてやがる。

「まあ、たしかに周囲の人間が心配になるのもよく分かるよ。だってその体型じゃあね。まっ、昼間っからビールを飲んでるんだからそうなるのも当然だけどね。特にビールはお酒の中でも極端に糖質が高いしプリン体の含有量も多い。そんな体の敵を飲むくらいなら水でも飲んでたほうがマシなんじゃないかな」

うぜええええ。小賢しいことをあれこれいいやがって。人の体型をそんなにあげつらうんじゃねえよ。

「失礼だけど、体重身長などをこっちに書いてくれないかな」



本当に失礼だな。

「いや、あ…いらいないというか…」

口ごもりながら拒否しようとする俺。

「こちらに記入済みのものを用意しておきました」

シキナが割り込んできて差し出す。くっそ、コイツに調子に乗る材料を与えるんじゃないよ。

「あ、ありがとうございます」

しかもシキナに対しては敬語なんだな、コイツ。できるオンナには敬語とか苛立たしい。オンナのくせに。イライラする俺をニッコニコな笑顔でこっちを盗み見てくるシキナに気がついてイライラがさらに溜まる。コイツ帰りのエレベーターの中で犬になる催眠かけてやるから覚えてろよ。

「あー、これはかなりヤバいね。今すぐ心筋梗塞で死んでもおかしくないレベルじゃないか。高血圧、肥満体、それに血糖値は危険水域。さらに不規則な睡眠に食事はジャンクフードばかり。毎日五本以上の飲酒にタバコ。やめられないんだったら死んだほうがいいんじゃないかな」

コイツ！くそ、今すぐ殺したいレベルだろ。年下のくせに偉そうにあれこれいいやがって。お前に関係あることじゃねえだろうが。

「いや、別にもう気にしてないというか…。見ないことにしているというか…」

催眠の設定をシキナがしたせいでどうなってるかわからねえし。くっそ。

「しかもその無精髭。まともに肌のケアもしてないだろうし、備考欄にいいオンナとやりまくりたいって書いてあるけど、行動と言動が噛み合っていないだよ。あと、さっきから口が臭いし」

余計なお世話だったの。女の癖に小癪な！

苛立ちのままに隣に座っていたリナサをつかもうとする。なんだかんだ言ってもコイツ抵抗できないように『調整』されてるんだろう。

と思ったが、即座に俺の手は払われる。

「ホラ、鍛えてないからだよ。君みたいな古臭いおっさんは女だったら無理やり押し倒せばやれるとか思ってるんじゃないかな。最低だね。軽蔑しかないよ」

見下すような、憐れむような目で睨まれる。そしてそのままりナサの手が俺の肩をつかむ。とっさに払おうとするが、固くて全然解けない。

「これは話を聞いてくれた特典の縄跳びだよ」

そう言って俺の手を紐で縛る。ドヤ顔が一気に滑稽に映る。つまり、強い女に逆レイプされる、そういう趣向なわけだ。

「トレーニングの必要性がわかるまでレイプして犯さなきゃね」

抵抗してみせると嬉しそうに煽ってくる。笑いを堪えるのがきついね。



「ん？その程度なのかな？男サマの癖に。ちょっとは鍛えなよ。じゃないと…」

更に力が入って俺の体をソファに押し倒す。高身長で筋肉質なだけあって余裕で俺のことを制圧してくる。きっと催眠のことを知らなければ恐怖だったろう。だけど、分かっているからお笑い草でしかない。

「キミが犯される前にボクがキミを犯しちゃうよ」

俺をソファに押し付けながら乗っかってくる。整ったボーイッシュな顔が自信満々に俺のことを見下しながら、サディステックに笑う。片手で俺のことを押さえつけならもう片方の手でズボンを脱ぎ去り、スポーツパンツ越しにマンコを俺のチンポに擦り付けてくる。

「ホラ、弱いと思ってた女にレイプされちゃうんだよ！朝からジョギングしてムレムレのパンツを擦り付けられるの気持ち悪いだろう？」

グリグリとコットンのスポーツパンツが俺の竿に押し付けられる。本人は嫌がらせしているつもりなのか意地悪な笑みを浮かべていて、それがさらにシチュエーションの変態具合を際立たせている。しかも彼女の言葉によってリナサの体からかすかに香る甘い匂いの正体もわかる。

なるほど、そういう趣向か。

グニグニと押し付けられる割れ目。パンティ越しでも感じられるほど熱い。

「まったく、レイプされてるくせに固くなってきてるじゃないか。ヘンタイなのかな？」

フフンとわらって見せながら腰を浮かせて半勃起したちんこの亀頭にスポーツパンティをこすりつける。敏感な亀頭に Cotton のザラザラした感触が激しい刺激になる。

「ウヒヒ、やめてよ、ヒヒ」

口だけで抵抗して見せるとリナサは更に興奮したのか、俺の亀頭の上で激しく腰を前後に振る。まるで発情したオス猿だ。徐々に俺の先走りと彼女の愛液でパンティが濡れてニチャニチャと音を立て始める。



「ほら、もっと頑張って抵抗しないと犯されちゃうよ！キミが下に見ていた女にチンポを啜えこまれてギュッギュって絞られちゃうよ。好きでもない相手にザーメン奪われて最悪だろ？」

ふひひ、完全にご褒美なんだよな。むしろ早くそうしろや。トレーニングマニアの強いオンナにだらしのない中年男のザーメンでマーキングしてやるからな。

「ほーら、もうガチガチに勃起しちゃうてるじゃん。全身隅々までだらし無いくせにチンポだけは鍛えちゃって、どんだけ風俗通いしたのかな？まっ、そのチンポもボクの鍛えられたマンコで情けなくピュッピュしちゃうんだけどね

♪」

上機嫌で俺のことを逆レイプしながら片手でパンティをずらす。ぴっちり閉じたオナナの場所を俺のチンポに向かってグリグリと落としてくる。

「んっ、こんなのオナニーと変わらないよね。年下の女に押さえつけられて肉バイブ扱いされるのは最低の気持ちなんじゃない？

ま、絶対やめてあげないけどね」

生暖かいラブジュース亀頭にかかると。

そのままぴっちり閉じた肉の割れ目がチンポに向かって押し付けられ、徐々に亀頭を包み込んでくる。

「んん、…ふう…太いねえ…んふう…」

思わず彼女の本音が漏れる。キュツとしまつて熱い割れ目が俺のガチガチチンポをゆっくりと飲み込んでいく。ミチミチと愛液をかき混ぜながら上位の女の内側へ侵略していく俺の男の部分。

俺のチンポを包み込みながら、リサナは熱くて狭くて、ニチャニチャと音を立てながら上下に腰をふる。俺のことを見下している表情は腹立たしいが強気な女がワケも分からず自分から腰を振るのは愉悦だ。さっきは知った風なことを言っていたが、何も知らずに逆レイプしてくるさまは完全にバカ女そのものだ。

「ホラ、いいんだろ？」

あっふう… おつ、女に好きにされちゃってええ… チンポ固くしちゃうの屈辱だろ？

んっふっ、こう動くっ… っいいんだろ？ っふうう」

グリグリと押し付けてくる。ヌルヌルと愛液が飛び散る。引き締まった体が扇情的に俺の上でくねる。鍛えられた筋肉も、よく手入れされた健康的な体も今や俺を興奮させるスパイスでしかない。

「ふっ… ふうう… ふ、太いねえ……っ。

き、キモチイよ… ふうう… んっふうう」

少しずつ腰を振る速度を上げてくる。



「んんっ、キミもおお、いいんだよね？

チンポしごいてえ…強制的に気持ちよくしてあげるからね！

んっあっつふううう…屈辱的だろ？」

パチュンパチュンっとリズムカルに腰をふりはじめるリサナ。積極的な割にはまだ足りないね、フヒッ。ここは年上の本当の男の魅力ってやつを教えてあげなきゃね。

腰を落としてきたタイミングを見計らってズンツと思いきり一気に突き上げてやる。むっちりと搾り取るように絡みついてくるマン肉の一番奥に強引に亀頭を打ち込む。

「んんっつふううう！！

なっ生意気なチンポのくせにいい…」

不意を疲れた逆襲に慌てて快感を隠そうとしはじめるリサナ。今度は逆に俺がニヤニヤしながら更に追い打ちをかけてやる。たった一瞬の反撃でリサナの余裕が崩れ去ってしまう。

「ひっ、ひぎゅっ…こ、こんなぁ…ダサイおっさんのおお…くせにいい」

唇を噛んで耐えようとするリサナ。だが、傍目にもわかるほどの焦りを隠そうとするイケメン女子サマ。

「っふひひ、これじゃあどっちがどっちをレイプしてるかわからないね。リサナのほうが弱かったんじゃないかな？」

「んぐっ…そんなこと…ないiiiiii!!」

歯を食いしばりながらあえぐリサナ。普段一番使っている腰振りだけは俺が負けるはずねえんだから。

「フヒヒ、これがいいんだよね？男に好きにされちゃってマンコ濡らすの屈辱だよね、ヒヒ？」

さっき言われた言葉を今度は俺が言ってやる。俺の上に乗って余裕の笑みを浮かべてた女が必死で首を振りながらオナナの顔を隠してやがる。だが、赤くほてった肉体も、荒い息遣いも彼女の言葉を裏切っている。

「んんっ、ふうっ、調子にのってええええ」

屈辱に整った顔を歪ませながらこらえるリサナ。いつの間にか腰を振る速度も遅くなっちゃってるね。ここは男の力ってのを見せてやんなきゃな。

「鍛えてるんじゃないの？フヒッ、スピード落ちてるよ。トレーナーなんだからもっと頑張ってみせなよ」

そう言って突き上げてやる。グッポグッポと締め付けてくるアスリートマンコをチンポで小突き回すの最高だね。

「んっ… ふっ… んんんんん」



一生懸命こらえるリサナ。そんな彼女の背後に腕組みしながらニヤニヤしているシキナがいた。

「スペシャルコーチなんですよ？ご主人様より腰振るのが遅くなってるなんて職務怠慢じゃないか。『スペシャルコーチ』らしくちゃんとガンガン腰を振らなきゃ」

その言葉とともに落ちかけていたペースが一気に回復する。だが、声を押し殺せないことから彼女の意志とは無関係なのはあきらかだ。命令されて意志とは無関係に腰を振らされてるから声も我慢できなくなっただけだ。

「んあっ！あっふうう… あっくうう！

ひゃあっ！あっ！はあっ！あああっ！んふううう」



なるほど、それが催眠のキーワードってわけだ。ふひひ、こっからはこっちのターンだよ。

タイミングを合わせながらズンツと思いつき腰を突き上げる。

「あひやあああ！ あっつふううううんんんん！」

イケメン顔とはずいぶん違う無様なメス声が漏れる。

「ねえ、今イッた？スピードおとさないでね、『スペシャルコーチ』」

「ひやあっ！ いっれ、あつくん、いっれないiiiiii…んふっふんん」

グチュグチュと滑った音を響かせながら腰を振り続ける。否定しているくせに腰をくねらせながらもビクツビクツと体を震わせ、明らかに感じまくっている。

「ひひ、スペシャルコーチなんだから正直に言ってよ」

「おっ、ふほおおお、イツらあ！ イツらあああ！」

あつ…ひやあああつ、くうんん」

キーワードで無理やり言わせる。催眠ってこの瞬間が最高にキモチイんだよね。イヤイヤ首を振って拒否しながらもキーワードのせいで認めてしまうイケメン顔マジ惨め。

「ほおお、つくううう…つかないっれええ…」

主導権を握った興奮から固くなった俺のチンポに貫かれたリサナが惨めな喘ぎ声を出す。グッチュグッチュとリズムカルにイッた直後のほぐれたマンコをがつつりかき回してやる。

「ひゃうう…やめろ！」

んんっ、デブオヤジのおお…くっ、くせにいいい…！

ほっ、おふおおおおお！」

悔しさをにじませ体をのけぞらせてヨガるアスリートボディ。完全にぜい肉つきまくりのおっさんにあっさり負けてやがる。

『『スペシャルコーチ』なんだからイッた回数ぐらい自分でカウントしなよ』

「ひゃっ！ あっぴよおおっ… さっ、三回目イッてるううう♡」



肢体を反り返らせてチンポにたやすくイカされるザコトレーナー、リサナ。

ほぐれてきたアスリートマンコが締め付けながらもたやすくチンポを受け入れてくる。徐々にオナナの体が俺を受け入れてきてるってわけだ。

「フヒヒ、レイプしてきたくせに返り討ちにあったザコマンコじゃん」

「うっ…ち、ちがううう！」

抵抗しようとするキュッと締めまりが良くなるのおもしれえ。ってか嫌がりながらも腰をガンガン振りたくって自分で自分を追い詰めてるし。

『『スペシャルコーチ』なんだから弱い場所に自分でぐりぐりしてよ』

「おっつ… ぴょおおつ…んっほおおお…！おっおおおおお！」

腰の動きにグネグネとツイストがかかって超気持ちいい。普通に腕力だったら絶対勝てないけど催眠キーワードで自分で自分を追い詰めさせるのめちゃくちゃ面白ええ。

「ひゃああつ、よ、四回目えええ、イツでるウウ！イツちゃってるううう！！」

「もう、素直じゃないね。フヒツ、認めなよ、ザコだって。俺の手を縛っておきながらチンポだけで負けるんだからザコ以外の何物でもないじゃん」

「んっきゅっつっふっふううううんん！ダっつふううう…メなのがいい……」

もうなにいつてるのかわからないね。オラオラ、いい加減負けを認めなよ、うひひ。

「おっごおお！こ、腰がああつ、勝手に動くううう…っくふうう…」

グイングイン激しくグラインドしながらケツフリとかマジエロい。ヤバすぎんだろ。ロデオマシンに乗ってるみたいに激しく腰を上下に動かすたびにニチャニチャと滑った音が響き、パシャパシャと生暖かい液体が飛び散る。誰がどう見てもイキまくって正体をなくしているリサナはザコだった。

「ら、ひっぐううう！らめええええ！こ、ごれえ、ラメなのおおお！ほっんごおっおおお」

「うひひ、そろそろ俺もイキそうだよ。当然中出しだよ。リサナちゃんが俺の事レイプしてるんだから。お望み通り汚い中年ザーメンをたっぷりあげるよ、ふひっ」



太さんのデカマラに完敗しちゃいましたぁ♡ザーメンいただいてえ、勝てないって思ったのお。

太さんに勝てるわけがないって。むしろボクのザコマンコを太さんに鍛えてほしいんだぁ♡」

なるほど。ザーメンがトリガーになってたわけだ。中出しされて敗北することで、体育会系的な上下関係が刻み込まれたってところかな。俺にはかわらないってね。

「まったく、トレーニングが必要なのはリサナのほうじゃないか」

「うん、スコア一対五でボクの完敗だよ。こんなにザコマンコだったなんて…」

大きな体を一生懸命縮めて上目遣いで俺を覗き込むイケメントレーナー。ギャップ萌えてやつなのかな、案外かわいいじゃんと思ってしまう。

「いいこと思いついた。ふひっ、これからは俺がリサナのマンコをトレーニングしてあげるよ。しかもタダで」

「え！？本当に！ぜひお願いしたいよ」

「いいよ、じゃっ、まずは散々リサナちゃんのエロ汁で汚れた俺の下半身を掃除してよ」

そう指摘してやると焦ったように申し訳無さそうに謝る。

「…あ……、ごめん」

ゆっくりと俺のチンポをぐちゅぐちゅに滑ったマンコから引き抜く。

「んっ…ふううう」

せつなそうに卑屈な声を上げてでかい体が起き上がっていく。

「全裸になってね」

その俺の命令にも「わかったよ」と素直に従い、そのまま服を全部ぬぎさる。



そして再び体を縮めて俺の股ぐらの間に潜り込んでくる。

「んふうう…これがさっきまで入ってたんだね…」

ゆっくりと半勃起状態のチンポがリサナの生暖かい口に吸い込まれていく。

そのとき、シキナが満足したような顔をしながら割り込んできた。

「リサナさん、『スペシャルトレーニングメンテナンスモード』」

次の瞬間、電源を切ったようにリサナの目から光が消える。

「お疲れ様、どうだったかな？トレーニングは」

「あー、いいところで切るなよ」

俺の抗議を無視してシキナが言葉が続ける。

「でも、この小憎たらしいメスをメタクチャにしたいんだよね？」

「まったく、よくわかってるじゃん。ふひっ、さすが俺の女だ」

「ご主人様のためにおもちゃを用意するのも私の仕事だからね。

ほら、ご主人様の下半身をそこの汚い布切れで丁寧に拭きな」

そう言って脱ぎ捨てられたリサナのジャケットを指差す。

機械的な動きでそれを取り上げて俺のムレムレの金玉の後ろを拭き始める。

意識がないほうが整った顔立ちが彫刻みたいで、より強調される。そして、そのかっこいい女がブランド物のジャケットでザー汁まみれの下半身を拭いている。興奮しないほうが難しい。

「リサナさん、初めてあった時はこの人をどう思いましたか？」

ニヤニヤ俺みたいな笑顔を浮かべながらそう尋ねるシキナ。

「きもちわるい。常識がない変質者…」

まあ、そうだろうな。

「今はどうかしら。たっぷりイカされてザーメンもらったよね」

わざとリサナの髪の毛を撫で回して乱れさせながらシキナがそう聞いた。まるでペットの犬をなでてみたいだ。

「強くて、かっこいい。尊敬してる。…でも、健康が心配…」

シキナがこっちを見る。それを前が言わせてるんじゃないよな？

気まずくて話題を帰るために別のことを聞く。

「っで、リサナちゃんは彼氏とかいるの」

「うん…、同じ会社の同期のコウスケ。大学時代から一緒に暮らしてる」

おい、コイツさらっと聞いていない情報も出入れてきやがった。そういうリサナちゃんには罰をあげなきゃね。



「へー、同棲してるんだ。じゃっ、リサナちゃんは今日から下のMCリクルートの寮に引っ越してね。ザコマンコ鍛えるんならわざわざ通勤時間かけて出勤する時間とかなないからね、ふひっ」

まっ、本当はいつでも呼び出せるオナホとして俺のコレクションに加えてやるってことなんだけどね。

「はい…寮に引っ越します…」

一瞬眉を寄せるも、すぐに無表情に戻って復唱する。

「あとはリサナさんにはMCリクルートに入社してもらうよ。今の会社にはMCリクルートからの派遣社員ってことで残ってもらうけどね」



シキナが口を挟む。相変わらずコイツえげつないことをさらっと提案してくる。俺も人のこと言えないけどね、フヒツ。

「MCリクルートの…派遣社員になります」

残酷な暗示を受け入れるリサナ。

よくよく見るとまつげ長いし、女っぽいところがすげーエロい。

無造作に髪をすくい上げて匂いをかぐ。汗のはずなのにシトラスっぽい匂いがする気がする。

「フヒヒ、リサナちゃん、これからはもっとチンポに媚びることを勉強しようね」

「チンポに…こびる…」

光のない整った瞳と形の良い唇が無機質に受け入れる。

「リサナさんって女の子にもてるよね？」

シキナがリサナの頭をつかんで上を向けさせながら聞く。

「…はい…」

空虚な瞳が俺たち二人を見上げながらそういう。

「ふふ、思ったとおりだよ。でもいままでチャホヤされてきたリサナさんはウソのリサナさんだったのよ。本当のリサナさんは踏みつけられたいマゾ犬なのよ」

「ウソの…ボク…？」

「あなたはいじめられればいじめられるほど相手が好きになるの」

「いじめられれば…いじめられるほど…すき…なる…」

繰り返すイケメン顔に向かってシキナがペツと唾を吐く。

「なめなさい」

頬にたれた唾を色素濃いめのリサナの舌がすくい取る。

「こんなところかな。ご主人さま、なんかあるかな？」

忠犬シキナがこっちをみる。

「そうだな。リサナちゃん、俺の言うことは絶対正しいからね。考える前に従えよ、フヒ」

「ぜったい、…た…だし…い…」

ゆっくりとそう繰り返すのを確認してからシキナが言う。

『『スペシャルトレーニングメンテナンスモードエンド』』

はっと驚いた顔をして目を覚ます。混乱した表情が最初のイラつく感じと真逆で可愛くなってつついじめたくなる。



「そんじゃ、今日一日全裸土下座の刑ね。ザコマンコのくせに俺のこと見下したんだから当然だよな」

「はい！」

よくわからないまま土下座し始めるデカ女。なかなか面白い見ものだ。

「このMCリクルートの契約書にサインしてね。あと、この社員教育資料を読み上げて今日中に暗記しなさい」

「え…はいい…」

土下座した体勢で無造作に渡された紙を受け取るリサナ。書類をわたしながらシキナがニヤニヤしながらアイコンタクトで今日は全力で『新人いじめするよ』と伝えてくる。

土下座してMCリクルートの教育資料を差し出した状態で床に膝をついているリサナ。つい一時間前までの鼻息荒い感じがかけるもない。

「んんっ…」

俺が背中に腰掛けるとそんなうめき声が聞こえる。小声で覚えるために新人教育資料を読んでいる。

「MCリクルートの社員は家族やパートナーよりもご主人さまを愛します。男性器は女性にとっていちばん大切なもので男性器がついている男性は相手にかかわらず敬います。男性の序列は男性器のサイズで決まります…」

いつのまにかシキナがたたんだらしいスーツと社員証が隣に置かれてさらにリサナの惨めさを際立たせている。

「まっ、今日は暗記するために定時ではあがれないわね。終電が過ぎたらテストしてあげるね」

サラッと言うシキナにリサナがキッとにらむ。ただ、その瞳の奥には怒りだけではない媚びた甘ったるい感情が含まれていた。

数日後

「太さん、今日もトレーニングの時間だよ」

そう言って嬉しそうにリサナが近づいてくる。最初の汚いものでも見るような表情はかけらもない。



白いトレーニングウェアが眩しい。しかも、インナーもガードも付けていないせいで乳首が透けている。その上白いトレーニングウェアに手書きで彼女自身を貶めるようなメモが書き込まれている。右乳首には『↓超ビンカン』、クリトリスには『←ガチ弱点♡』、マンコには『ザコマンコ→』といった具合だ。

「ふひひ、仕方ないなあ、付き合ってるか」

「太さんじゃないとお願いできないんだ。よろしく願いますよ。」

「じゃあ、まずは今日のトレーニングレコードを確認させてもらうね」

そう言いながら引き締まった腹筋を指差す。そこには今日の彼女のメモが書かれていた。

Risana♀22

182cm 66kg

ちつトレ 07:15 12:40 14:12

フェラトレ 12:50

「ちつトレは朝出社前と昼休み、あとジムでのコーチング中に発情して一回やっちゃったんだ。フェラトレの方は今日は昼休みにバナナでやっただけだね。最低毎日三回やるように指導してもらってるのに忙しくてできなかったよ」

膣トレってのは確かオナニーだ。フェラトレはフェラの練習だったか。大真面目にオナニーとフェラ練習の報告してきて、できなかった言い訳までするイケメン女子(笑)。

「うひっ、だめじゃないか。せつかく時間作るために引っ越したのにその程度のトレーニングもできないなんてね」

「いやあ、面目ないよ」

「っで、彼の方は最近ちゃんとトレーニングしてるの？」

リナサは会社の同期の男と付き合っていて、しかも同棲していた。まったくどいつもこいつも恋愛脳かよ。

当然リナサは階下のMCリクルートの社員寮に引っ越させて、運悪く彼女をオレに盗られた残念彼氏くんにはリナサに遅漏化トレーニングをさせている。

「うん、今日も朝一でキツめのハンドジョブをニセットしてコックプレスにロックしたよ」

要は普通のセックスで再現不能な強さで握って手コキした後に貞操帯に突っ込んで鍵をかけたってことだ。まったく彼氏くんカワイソーだね、フヒヒ。

ちなみにフェラの練習をさせてるのは、リナサにはエロトレーナーとして客のチンポを啜えさせているからだ。

「もー、そんな事より早くトレーニング始めない？」

もともとエロかったのかすっかりセックス中毒になりつつあるリナサが近づいてきて俺を抱きしめる。柔らかいデカ乳が俺の胸に押しつぶされ、トレーニングパンツ越しにチンポにマンコを押し付けてくるのがマジでエロい。完全に性のケダモノと化している。スポーツやっていると性欲強くなんのかな。

「今日もボクのザコマンコ鍛えてくれ」



ずりずりとマン汁のシミが徐々に広がりつつあるマンコをトレーニングパンツ越しに円を書くように押し付けてくる。若いオナナのフェロモンたっぷりの汗の匂いに包まれるとチンポは否応なしに硬くいきり立つ。

そのままリサナは俺を抱きしめた状態で器用にポケットから出した精力剤の粉末を開けて口に含んだ。

「んん…ぢゅりゅ…んちゅっつ、がらがらあ〜」

口の中で精力剤を唾液と混ぜ合わせて、そして俺より身長が高い彼女が俺の唇を上から奪う

「んふっ、ちゅっ…ちゅぷぷぷ」

精力剤をオナナの唾液でよくシェイクしたセックスのためだけの特製ドリンクってわけだ。

「ぢゅぷぷぷぷ…」

強く抱きしめながら舌を差し込んで精力剤を俺の口の中に押し込んできた。くねくねと俺の口の中で卑屈に這い回る舌が心地よくてチンポが硬くなっていき、その硬くなったチンポに柔らかなトレーニングパンツ越しのモリマンが押し付けられる。時々クりに引っかけたりリサナの体がピクピク震えるのも楽しい。

「んっふうううう…」

鼻息を荒くしながら俺を離す。透けたトレーニングウェア越しに乳首が勃起しているのがよく見える。





「あああ…やっぱあ…♡今日もボクのザコマンコを太さんのデカマラで鍛えてよ♡

まずはスタンディングフロントを何本かよろしくね」

スタンディングフロントってなんだっけ…と思っていたらリサナが再び抱きしめてくる。今度は彼女の指がトレーニングパンツの裂け目を広げる。いつでもハメれるように男モノのパンツみたいに目立たない穴を付けたトレーニングウェアだ。シルバーフィットネスで普通に販売させている。リサナのファンのメス共が何も考えずに買うからね。

「んっくう♡」

そのまま勃った状態で戻った俺のチンポを飲み込んでいく。つまりスタンディングフロントって横文字でそれっぽく言ってるがただの対面立位だ。

「やっぱり、んっくう…太さんのきついいい…」

密着しながら艶めいた口調でそういう。俺よりでかくて強いイケメン女が俺のチンポのポジションに合わせて膝を折りつつチンポを受け止めるのは優越感以外の何物でもない。体格でも筋力でも学歴でもコミュ力でもすべてで俺が勝てないブランドメスが自分から股をひらいて嬉しそうに甘えてくる。

「んっんん、いついいい…」

膝を曲げながら腰を落とす。

「にいいい…♡」

そして屈伸するように伸ばす。完全に全自動肉オナホの拳動だ。バカなりサナはトレーニングだと思ってるけどね。

「あっっほおお、いっちぢぢい♡」

俺のチンポの形に広がったイケメン王子様マンコがキュッキュッと甘く絡みつく。

「にっいいいい♡」

快感にイケメン顔を歪めながらトロトロ腰をふる。これは活を入れてやらなきゃね。

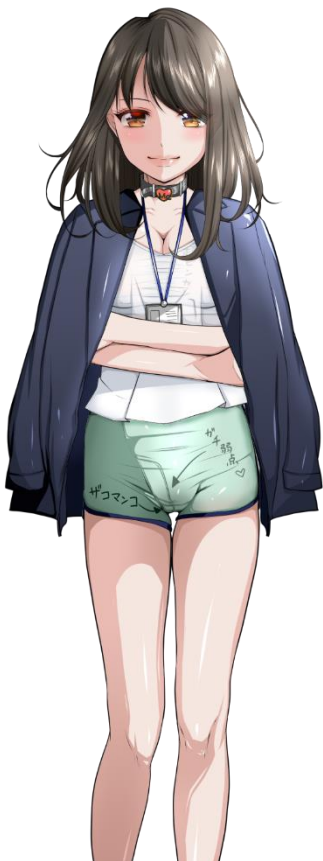
彼女のペースを無視して俺はズンツ！と腰を打ち付けてそのまま子宮口をグリグリ押しつぶす。

「んぴょっお！っほおおおおお！」

変な声を上げながらガクガク快樂に震えるリサナ。本当にザコマンコだ。オナニーさせまくってイキ癖をつけてやってるから最近さらにザコになってきてる。そのうちチンポ入れられただけで絶頂する弱々マンコに仕上がるだろ。

「フヒヒ、弱すぎじゃん。そんなんじゃチンポ入れられただけですぐ負けちゃうんじゃない」

「ひゅっぐううううう！そ、そうなんだあああ！



鍛えてるのにいい、マンコ弱くてえ、ほっおおおお♡勝てないのおお♡」

「せっかくこうしてトレーニング付き合ってるのにね」

ズンズンっと快感に突き動かされるままに腰を振ってやる。

「おっほっ、おおお！すまないいい」

謝罪しながらも痙攣して絶頂するザコマンコ。ジムの営業に来たくせにマンコトレーニングと称してハメられるために中年オヤジに金を貢いでいるのが今の彼女だ。

「ほっぐっ、おっ！おっ！

れも、かれないいいいい♡」

せつなそうに熱くほてった体で抱きしめてくる。

「イケメン面して女相手にイキってるのにね、ぶふううう」

「そう、そうなんだああ！だってオトコにはああ、はっふうう、勝てないいい♡勝てないんだあああ！

まっ、マンコがあ♡ザコ、ザコだからああ」

キュンキュンとマン肉を震わせながら俺を抱きしめる。初めてあった時にあんなに俺を見下していたくせに今では無意識に俺のチンポに子宮口をあわせてグリグリされたがるマゾ便器に成り下がってしまった。

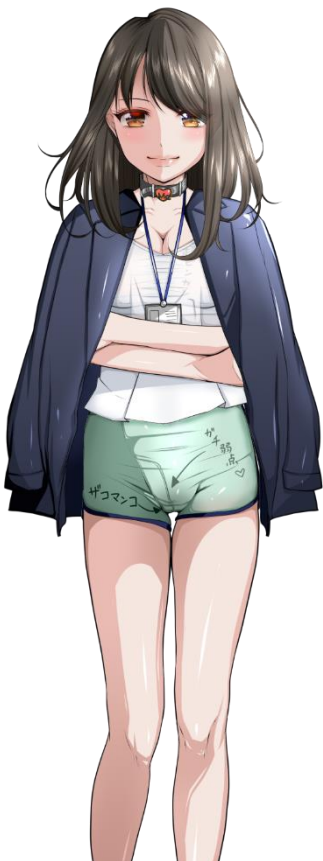
「お、つくおおお…っほおおお！」

惨めなほど舌を突き出してアクメリながらも一生懸命立ち続けようとするリサナ。今まで女子にもてまくっていたらしいけど、この顔を見たらどんな女もドン引きじゃないかな。それとも羨ましくて股開くかな？

「いつら♡♡♡いつらああああ、まら、デカチンポんいいい…んぴよおお…ザコマンコおお、小突き回されてえ、イツちゃつらああああ……」

鍛えられたボディも、よがり狂いながら悶えてたら型なしだね。

「ひよおっ、お♡ザコマンコお、かれないいい♡♡デカチンポにかれないいいいいいいい！」



巨体で俺を包み込むように深く抱きしめながら絶頂するリサナ。オナナの筋肉がビクンビクンツと快感に反り返るように震える。そして鍛えられたアスリートの膣肉がうねるように俺を包み込む。

「おいおい、また勝手にいったの？ザコすぎるよ」

「んっふうう…ごめん…んんう…なさいいいいいい」

「おら、全く仕方ないね。マンズプレスで鍛えてあげるから準備しなよ」

ぬぽんっとチンポを抜く。まだ一発も出せてないせいでバキバキに勃起したまんまだ。

「ああっ、はああ、ふううう」

リサナはせつなそうに喘ぎながら最近応接室に追加した首枷にふらふらと体重をかける。ガチャンっと手錠の要領で首枷が締まる。

「ふうっ…んふう…よろしくう願いますよ」

そのまま彼女はこっちを見ながら所定の場所に足を置く。首同様に両足が固定される。

リンボーダンスで極端に低いバーを潜ろうとする姿勢とでも言えればいいだろうか。膝をおってマンコを突き出した姿勢だ。下半身を高く突き出した状態で首と両足を固定する。恐ろしく屈辱的な姿勢だが、リサナはトレーニングだと信じている。

「ふひひ、じゃっ、一発めいくよ」

突き出したリサナの両手を掴んで全体重をかけて上方向に向けられたマンコにチンポを勢いよく押し込む。

「んびょっっほおおお！ おおっほおお」

何度目かの理性のかけらもない淫らな奇声を発しながら絶頂するアスリートマンコ。パタパタと吹き出した潮が床に水たまりをつくる。

だが、この体勢で固定しているのはザコマンコがどれだけいても遠慮なく俺が腰を振れるからだ。マンズプレスの名前の通りデカ女でも固定されてしまえばチンポを突き刺されるだけの存在になってしまう。

「ふっんうう、マンコのくせに偉そうにしゃがって！」

腰を落とすたびにひどく惨めな喘ぎ声が響く。イキまくってトロトロのマンコにチンポを突っ込むと、もう風呂の中でオナニーしているみたいだ。汗のせいでトレーニングウェアも透け放題で全裸以上に扇情的だ。

「ひゃあああ！ご、…おおめん…なっしゃいいいいい！」

一言言う間にもチンポ突っ込むだけで面白いほどイキ狂って鳴く。

「ざ、ザコマンコでえ、んっほっおおお！」

「ごっ、んほおっ、めんなさいいいい」



マンコを一番高く掲げながら固定されたデカ女が俺を見上げながらヨがる。鍛えられた膣肉が無理な姿勢の中で複雑にチンポを擦り上げてくる。

「ざ、ザっコおお…んっふっ…、…マンっコおのくせにいい、おチンポにらいしてええ、…んっふおお、ちょ、ちょーしいいいい、のつれましらああ♡♡」

チンポに負け、マゾ化したりサナのハスキーボイスがチンポにくしざされた喜びとともにあえぐ。気の強そうに上を向いた乳首も、イケメン顔も全部俺の下にある。さっき体面立位で俺に覆いかぶさっていた体が拘束具でコンパクトに折りたたまれ俺好みのサイズにされている。

「今日も、リサナの負けだな、フヒツ」

そう言いながらチンポをグリグリ押し込む。

「んぐっひゃああああ！しょうらああああ！負けえええ！

ボクのおおお、負け♡負け♡なのおおおお！

ち、んぽ♡にいいかれにゃいいいい♡♡ザコマンコなによおお♡♡♡」

絶頂することで反り返った体はさらに無理やり股間をオレに押し付けてくる。まるで鍛えられた子宮が四十路デブチンポに求愛のダンスを踊ってるみたいだ。

「おおおお！おっほっおっつ！」

絞るようにチンポをコキ上げるリサナのバキュームキン肉マンコについて俺のチンポがイカされる。絶対受け入れるはずがなかった上級マンコに俺の1億匹の劣等精子が吐き出される。負け癖の付いたザコマゾ卵子が今頃俺の精子に小突き回されてますます喜んでいることだろう。

「あつ、ひゅうあああ…ありがろう…、んふううう♡♡」

中出しザーメンに礼を言うリサナ。

「ふうう…。悪くなかったけど、日に日に弱くなってるんじゃない？マゾトレナーさんよお？」

キツキツマンコで限界まで絞られて力が抜けきったチンポをズルズルとぬく。

「ひゃあつ、…あつ♡んん…らってえ、かれないんらからあ…」

息も絶え絶えのリサナの顔にまん汁とザーメンでどろどろになったチンポをのつける。

「んちゅ…ちゅるるる…んふっ、ふう、太さんがあ、ぢゅぶぶぶぶ…つよすぎりゅからあ…♡」

リサナが金玉の汚れを吸い上げながら言う。トレーニングの後はシャワーだけど、リサナの場合バキュームクリーニングだ。

今までずっと体育会系で鍛えてきた肺活量を使ってシワの一筋一筋まで吸い上げ、汚れを吸い取る。俺はその間ケータイを見ながら適当に時間を潰す。洗車機のように全自動でタマもサオも磨き上げる。

そして最後に顔の上についた汚れを拭って全て口の中に運ぶ。チングもチンカスも恥垢もだ。



「オトコのエネルギーいただきます♡」

イケメン声が似つかわしくない挨拶とともにゴクリと飲み込み、げっふーっと汚いゲップを漏らす。教育どおりのマゾマンコにどんどん変わっていくのが最近地味に楽しい。

隠しきれない笑いを漏らしながら彼女の腕のスマートウォッチをチェックする。万歩計モードになっていて彼女の体が揺れた回数、つまりは俺が腰を振った回数が記録されている。そしてリサナのトレーニングでは俺の腰振りには一回十円となっている。

「ふひひ、もう五千パンパンしたんだね、リサナちゃん」



「うん。ありがとう！でも、もっと太さんに鍛えてほしいな♡」

嬉しそうに微笑むイケメンスマイル。イラッときてチンポで顔をビタンとぶって隣のソファに座る。またやりたくなるまでの間リサナはソファの隣の間人テーブルとして頑張ってもらう。

ちょうどいい位置感に固定されているせいで隣のソファでごろごろする時に読みかけの漫画や飲み物を置くのにもいい。もちろん、リサナの上に座ってアナルを舐めさせながら別の女にチンポを啜えさせるのにもちょうどいいポジションだ。鍛えているせいで乱暴に扱っても罪悪感ないのが最高だしね、ふひっ。

翌日、起きてみるとリサナが出るとこだった。シキナが拘束を外してやったらいい。身支度をと整えてできるオンナモードのリサナだ。だけどこいつはもう以前の偉そうにしていたイケメン女子じゃない。

「あ、太さん、昨日はたくさんオトコのエネルギー分けてくれてありがとう♡」

身をかがめて俺を抱きしめてくるメスだ。できるオンナというよりヤレるオンナってとこだね。

「あんっ…♡」

ケツをもんでやると甘えた声を出しやがる。澄ました顔してるが、今だってマンコは冴えない中年ザーメンでタップタプのくせに。

「太さんにもっと鍛えてもらうために頑張ってくるね」

そう言って犬のように笑うイケメン女子。せいぜい俺のために稼いで、貢いで、そのうちエロボディも売ってくれ。客のジム通いの若い女も犯しがいがりそう。そう思っただけで勃起するのはこのエロメスがマンコを擦り付けてきているからでもある。

「じゃっ、行ってくるね」

甘くキスして、小走りで出勤する。昨日あんなに犯してやったのに…。バカみたいな体力だ。

